NATURE AND SCIENCE MUSEUM, TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE AND TECHNOLOGY

国立大学法人東京農工大学

科学博物館ニュース速報

Nature and Science Museum
東京農工大学
科学博物館

No.2 August 1, 2012　　第2号　2012年8月1日

博物館竣工・リニューアルオープンに向けて

梅田倫弘

いよいよ科学博物館がリニューアルされて10月3日から一般公開されます。これに先立ち、10月2日(火)午後3時より小金井キャンパスのグリーンホールで、学長並びに理事、文部科学省関係者を招いてリニューアル記念式典を行います。その後、宇宙航空研究開発機構の山口孝夫氏による「宇宙服開発の歴史と展望～繊維素材の視点から～」と題する記念講演が予定されています。ご興味のある方は、8月20日前後にご案内を差し上げますので、今しばらくお待ちください。

科学博物館は、昨年秋より耐震改修工事が行われ、今年の5月末に完工して、1万点を超える収蔵品が6月中旬から末にかけて博物館に戻されました。その後、学生、友の会、繊維技術研究会の博物館ボランティアの方々のご協力もあって以前にも増して魅力的な展示となるように復元されつつあります。また、大学の情報発信の観点から、大幅に見直しを行いました。1階の入口から入ってすぐの展示室は、両学部の学科紹介や教員の研究成果をテーマ別に展示する企画展示などを、さらに、2階展示室に、遠藤章先生顕彰記念室を常設します。

（科学博物館長）

博物館リニューアルに寄せて

朝倉哲郎

科学博物館リニューアルおめでとうございます。前豊田館長、現梅田館長、博物館教員の中澤先生、高木先生、それをサポートする事務の方をはじめとする多くの方の努力の賜物です。あらためて多大な努力に敬意を払いたいと存じます。

私自身、本博物館に関わってから、すでに４半世紀が過ぎました。博物館を一大学が維持していくことは、財政面からも運営面からも決して容易なことではありません。実際、前身の工学部附属繊維博物館が大学附属の博物館として新たにスタートしようとした時、館長として、どうしたら博物館が生き残れるか、どのように博物館の将来像を考えたらよいのか、中澤先生をはじめ多くの方と徹底的に話し合い、対応してきました。したがって、今日、博物館がリニューアルを迎えることになったのは、私自身にとっても大きな喜びです。

大学が博物館を持つ、これは、精神的な豊かさが求められる時代にあって、また社会に開かれた大学を目指す時代にあって、その意義は極めて大きいと思います。将来、農工大学が他の大学と差別化を図っていく上でも、本博物館を維持していて良かったと思う時が必ず来ると思います。これからも、博物館と関わっていきたいと思います。

（工学部生命工学科教授）

博物館ロゴの完成

科学博物館では、この度の本館リニューアルに当たり、博物館のロゴマークを作成いたしました。科学博物館の伝統と歴史を踏まえつつ、未来へと繋がるイメージをコンセプトとし、15作品もの候補の中から博物館関係者の厳正なる投票の結果、本速報右上のロゴマークに決定され、広報・社会貢献委員会でも承認されました。

デザインは、「Nature」と「Science」の頭文字を繭玉のイメージで作成し、工学のブルーと農学のグリーン、さらに博物館を象徴するレッドを使用しています。漢字ロゴには丸ゴシック系を使用することで、全体的にやわらかく、親しみやすいデザインとしました。

当館の歴史は明治19年（1886年）、東京農工大学工学部の前身である農商務省局蚕病試験場の「参考品陳列場」にはじまります。このロゴマークは、科学博物館の起源から現在に至るまでの一貫した資料である「養蚕」がモチーフであると共に、見方を変えると種から芽が息吹く様にも見え、まさに未来への繋がりを感じさせます。

博物館と共に、皆様に親しまれるロゴマークに成長することを願っています。

（科学博物館特任助教・高木愛子）

生まれ変わった展示室

～博物館・新しモノ紹介！（1）～

昨秋から開始いたしました科学博物館本館の耐震改修工事も、おかげさまで６月に無事竣工に至り、職員も７月から約半年ぶりに博物館内での業務に戻りました。そこで今回からシリーズで、改修を経て新しくなった施設をご紹介していきたいと思います。

第１回目は、博物館の顔とも言える展示室の設備についてです。

新しい博物館は１、２階の全13室の展示室で構成されています。全ての展示室にライティングダクトを張り巡らしており、展示は基本的にＬＥＤスポット照明のみで演出を行う予定です。また、一部を除いて新たにグリッド天井を採用し、壁面以外でも吊り展示が可能となりました。

何より展示室に入った皆さんの目を引くこととなるのは、ビルドインの展示ケースだと思います。改修前に設置されていたモノも含め、今回全て新しく作り直しました。内部での展示作業を行い易いよう奥行を広くした点や、調湿剤を目立たずに設置できるよう展示台の下部にポケットを設けるなど様々な工夫を行いましたが、一番拘ったのは照明です。３段階の調光が可能な２色のＬＥＤライトを用いることで、光の強さだけでなく風合

黒壁の展示室と展示ケース

いまで調整できるようにしています。

さらに展示室は、外光をブラインドで遮る白壁の部屋と、内窓により完全遮光した黒壁の部屋の大きく２種類に分けることができます。前者は外光を適度に取り入れることで、科学系博物館らしい明るく開放的な展示室となっています。展示資料によっては紫外線などに注意が必要ですが、「博物館疲労」と呼ばれる観覧中独特の疲労感に対し日光は非常に有効的です。

一方、今回の改修で特に拘ったのが後者です。浮世絵などの紫外線に弱い資料の展示室として完全に遮光するだけでなく、今回新たに壁面を黒くし訴求力のアップを図りました。薄暗い空間でスポットライトに照らしだされる資料の様は、さながら美術館の一室を彷彿とさせます。

（科学博物館特任助教・高木愛子）

この展示に注目 ②「女織蚕手業草」

当博物館には故鈴木三郎本学名誉教授（1900年～1982年）が長年にわたって蒐集してこられた蚕織錦絵版画作品コレクションの寄贈をうけ、約450点余の作品を所蔵、展示替えをしながら一般公開をしております。蚕織錦絵版画（さんしょくにしきえはんが）とは、養蚕・機織りに画題をとった、美人錦絵版画のことです。今回はその中から、喜多川歌麿の女織蚕手業草（じょしょくかいこてわざぐさ）を紹介いたします。

この作品は、寛政後期（1794～1800）の作と考えられており、蚕織錦絵中でも最も古く、かつ有名な作品の一つです。初期の蚕織錦絵の構図は、約40年前の延享元年（1744）刊行の後素軒橘守国の絵本直指宝（全１０巻）の第１巻にある蚕家織婦乃図（さんかしょくふのづ）から借用したものであり、守国の蚕織図はそれより約50年前清朝の康熙35年（1696）に刊行された佩文斉耕織図（はいぶんさいこうしょくづ）から借用しています。

蚕織錦絵には、錦絵の先駆である丹絵（たんえ）、紅絵（べにえ）、漆絵（うるしえ）等の手彩色版画がありません。また、蚕織錦絵自体の出現も、錦絵の発生期（1765）より20年以上も遅れています。その理由として、農耕や養蚕などは、当時の庶民階級が理想とした生活から、全くかけ離れてもので、画題としては好まれなかったのではないかと思われます。しかしながら、養蚕・機織りの仕事が婦人の手業草（てわざぐさ）である

女織蚕手業草

関係から、美人画の画想の着想にあることは確かです。そして、当時浮世絵美人画で人気作家の筆頭であった喜多川歌麿も、手業草（てわざぐさ）を画題に取り込み見事な美人画を制作したのでした。

次第に、蚕織錦絵は風俗美人画として庶民の興味を引き、他方錦絵の普及によって作労図として田舎向けにも喜ばれるような社会情勢になったことから、文化・文政以降になると作労図も錦絵の画題に多く取り上げられていきました。

（科学博物館助手・真貝哲夫）

学芸員課程通信②

今年度、新カリキュラムの学芸員課程がスタートしました。最初となる講義は7月31日からの『博物館資料論』です。昨年度まで2単位であった博物館資料論は、『博物館資料論』『博物館展示論』『博物館資料保存論』の3科目に分割され、各科目とも2単位となりました。時間数も内容も充実した課程となり、各教員とも万全の体制で臨みます。

また、博物館実習は、全ての授業科目を履修した3年生を対象に10月から開始します。特に今年度からは、新しい博物館をフル活用した実習内容となっています。また、例年同様、理系の特徴を活かした実習プログラムを構築しています。一人でも多くの学生が、資格を活用できるよう教員一同、努力していきます。

（科学博物館助教・中澤靖元）

スタッフ紹介

７月１日付けで科学博物館に着任しました北川和幸です。

科学博物館の耐震補強工事も終わり綺麗な建物に変わりました。雨上がりの朝、朝日が横から射した時には誠に美しく、凛々しく感じられます。テレビ撮影のオファーが来ないかなあとワクワクしています。

私は小金井のある市民グループに参加することがありますが、そこに品の良いおばあちゃんがいつもいました。私が農工大に勤めていることを知ると、いつも決まって紐のサークルの話になります。私はいつも聞き役で、あ～そうですか？あ～そうですか？という具合になります。このおばあちゃんにとって「農工大」イコール「博物館」なんです。博物館は地域に根ざした地域貢献を立派にしているなあと感じました。折角、博物館の仕事に携われるようになったのだから、いろいろ勉強しなければいけません。しかし、そのおばあちゃんも３ヶ月前に亡くなり、博物館職員として新館内に迎入れることが出来ず残念です。

『金環日食』がブームの頃、「日本科学未来館」、「かわさき宙と緑の科学博物館」（今年４月２８日リニュアルオープン）のプラネタリウムに行きました。いずれも大平貴之さんが制作した最新鋭の投影機が搭載されています。どちらも本当に綺麗で感動しました。大平さんは小学生の頃から地元である「かわさき宙と緑の科学博物館」を遊び場のように通っていたそうです。そして今では世界最高クラスのプラネタリウムクリエイターになりました。

翻って、我が博物館もリニューアルされ、10月3日から一般公開になる運びとなります。先の大平さんのように、これから来館される小・中学生が将来、繊維や科学に興味を持ち、農工大進学を希望し、クリエイター（博士）となる可能性も大いにありますので、充実した親しみやすい博物館にしていきたいと思います。

さて、宮本武蔵は「観見の二眼あり」と言いました。対象そのものを見る眼、対象の奥を見る眼の二つのことです。私にとって博物館は、自分が感動する場所から来館者を感動させて喜んでもらう立場に変わりました。来館者が何を感動したのか、或いは感動しなかったのか、その部分をどうように変えたら喜んでもらえるのか、「観見の二眼あり」の心をもって務めて行きたいと思います。

（科学博物館主任　北川和幸）

博物館活動日誌

★7月25日第2回科学博物館運営委員会開催

◆10月2日(火)午後3時より、小金井キャンパスグリーンホールでリニューアル記念式を開催します。

◆10月3日(水)午前10時より一般公開を行います。

「科学博物館ニュース速報」第2号

◆発行日　2012年8月1日

◆編集　博物館ニュース編集委員会

梅田倫弘・中澤靖元・高木愛子

◆発行　東京農工大学科学博物館